

ジョン・マクダウェル「価値と二次性質」

本報告では、ジョン・マクダウェルの「価値と二次性質」¹を紹介する。マクダウェルはピッツバーグ大学哲学科教授であり、McDowell(1998)の他、*Mind and World*, (Harvard University Press, 1994.)、*Meaning, Knowledge, and Reality*, (Harvard University Press, 1998.)等の著書がある。

本論のテーマはJ・L・マッキーおよびS・ブラックバーンら反実在論者が主張する投影説の批判である。価値を、事物が主体の感受性を触発することによって生み出す「反応」として捉えながら、触発の原因となる価値的性質そのものが対象に実在することを否定する議論に、マクダウェルは整合性を感じない。しかしこの価値の非実在を、マッキーは「価値の実在するという日常的な思考は錯誤である」という錯誤説によって、ブラックバーンは準実在論²をとることによって正当化する。両者による反実在論的な正当化に対して、マクダウェルは、彼等が価値的性質をプラトンのような一次性質モデルで捉えていることを指摘する。例えば、マッキーは(一次性質と二次性質の区別で有名な)ロックに従い、二次性質を投影上の錯誤を含む、前哲学的な意識によって考えられたものとみなしている。二次性質は一次性質の現れであり、事物に実際に存在するものではない。これを事物に実在するものとみなすならば、それは前哲学的であり、結局は一次性質の

¹ 'Values and Secondary Qualities', in *Moral Discourse & Practice*, in McDowell(1998). 初出は1985, *Morality and Objectivity: A Tribute to J. L. Mackie*, ed. by T. Honderich, Routledge & Kegan Paul.本報告で実際使用したテキストはMDPのもの。

この論文を取り扱った主な邦語文献としては以下のものがある。安彦一恵(1999)「二つの『合理性』概念—J.McDowell 的「道徳的実在論」の批判的検討—、『哲学』(第50号)、日本哲学会。美濃正(2000)「価値は実在するか?—マクダウェル説の批判的検討—」『アルケー』(No. 8)。

² ブラックバーンの立場については、兎玉報告を参照。

知覚モデルになってしまうからである。しかし、マクダウェルはマッキーの二次性質経験の理解が重大な誤りを含んでいるとし、二次性質としての価値的性質の实在の可能性を示唆するのである。

本論でのマクダウェルの主張は大きくわけて2つあると考えてよいだろう。1つは二次性質の知覚は基本的には誤りのないものとして知覚されるという意味で客観的だということを示すことである。2つめは、二次性質の知覚は、それが事物から触発されることによって生じる現象として知覚されることによって、まさに適切に理解されるということである。紹介論文は5節に区切られているが、本報告では第1、2節をこの序文に換え、残りの3節を彼の節立て順に詳しく紹介して行くことにする(従って、本報告の節立ては、実際のそれとは完全に対応しておらず、また節ごとの小見出しも報告者が便宜上たてたものであることとお断りしておく)。このうちの第3節(本報告第1節)は上で述べた1つめの主張のための議論を、第4節(本報告第2節)は2つめの主張のための議論であると考えてもよいと思われる。最後の第5節(本報告第3節)はマクダウェルによる結論であり、自身の説が投影説より優れている点が述べられている。

1.二次性質としての価値経験

紹介論文第3節でのマクダウェルの目的は、マッキーはなぜ二次性質としての価値の实在を受け入れないのかを説明し、それがマッキーの誤解であることを示すことである。

一般に、二次性質とは、ある種の知覚上の現れを示す傾向性によって対象に帰属させられるような性質である。例えば、我々の視覚の存在を排した場合、「赤さ」という性質が物体そのものに存在するとは考えられない。「赤さ」は物体の一次性質(例えば物体表面の分子構造)が我々の知覚に作用することによってはじめて顕現するような性質なのである。ここで实在するのは「赤い」という知覚を

我々に生み出す傾向性をもった一次性質のみであり、「赤さ」という二次性質そのものは実在しないのである。従って、マッキーは二次性質が事物そのものに存すると考える「常識」は錯誤であるという立場に立つ。またマッキーにとって「実在するもの」とは客観的なものであり、知覚上の誤り(例えば錯覚など)を含むが故に個人や状況に相対的な二次性質は実在するとは考えられないのである。

このようなマッキーの一次性質＝客観的＝実在する／二次性質＝主観的＝実在しない、という枠組み対して、マクダウェルはまず二次性質＝主観的という捉え方は誤りであることを指摘する。マクダウェルは一次性質や二次性質がそれぞれ客観的もしくは主観的と言われる際には2つの次元が存在し、マッキーはその点を見落としていると考える。1つめの次元での区別はマッキーも想定するような客観的／主観的の区別である。すなわち、性質を知覚する主体とは無関係に事物に存在するという意味での「客観的」と、対象の傾向性にとしてのみ存在し、それゆえ主体のおかれた状況や受容器官の状態に言及することなしには適切に理解できないという意味での「主観的」の区別である。一次性質はこの意味で「客観的」であり二次性質はこの意味で「主観的」である。2つめの次元での区別は、恣意的な想像を「主観的」とした上での一次性質および二次性質の「客観的」である。一次性質も二次性質もそこに存在する対象を通じて経験されるという点では、それは主観の恣意的な創作物ではないという意味で、客観的だと言えるだろう。「赤さ」は確かに主体がおかれる状況によっては対象から知覚されないかもしれないが、適切な条件下であれば等しく主体に「赤」の知覚をもたらす。それは、我々が「赤い」物を主体の判断によって「緑」に知覚することはできない、と言う意味で客観的なのである。

以上の2つの次元が混同され、二次性質のもつ第2のレベルでの客観性を見落とされた時に、二次性質の知覚に対する常識の懐疑、すなわち、二次性質は実際は存在しないという考えがうまれる、とマクダウェルは論じる。しかし、マクダウ

エルは、二次性質は第2のレベルでは客観的なものであり、主体の側の創作物ではないという意味で対象に実在する性質だと言うのである。

一次性質も二次性質も第2のレベルでは客観的であり、実在的だと言ってもよいはずなのに、ではなぜマッキーは一次性質のみを実在的とみなすのか。この答えをマクダウェルは「類似」の観念に見いだす。マッキーが依拠するロックによれば、一次性質が実在すると分かるのは、一次性質の観念が実在する事物の観念と「類似」しているからである。例えば、我々がある事物を「丸い」と知覚する場合、それは実際に当該の事物そのものが「丸い」からである。しかし、二次性質はそうではない。事物に存在するのは傾向性のみであり、我々が知覚する「赤さ」と類似した性質は事物そのものには存在しないのである。

このようなマッキーの考えに対して、マクダウェルは、なぜ同じ知覚経験として現れる形(一次性質)と色(二次性質)が一方を実在する事物そのものと類似すると判断し、他方を類似していないと判断できるのか、と問う。二次性質が事物そのものに実在するという素朴実在論を否定し、我々が事物そのものを直接認識することを否定するのならば、なぜ一次性質のみが事物と類似すると言えるのか。これに対してマッキーは「経験がもつ内在的特徴」(intrinsic features of experience)の存在をもって答える。経験の内在的特徴とは、例えば、視覚から得た観念と触覚から得た観念を「同じ観念」と知覚させるような特徴である。我々は習慣的に形の視覚イメージと触覚イメージを相互に関連させ、視覚において得られた二次元的イメージ(例えば陰影のついた円形)を即座に三次元的なイメージ(球体)として理解する。このような無意識的な解釈能力が経験の内在的特徴として理解されるものである³。このような特徴は我々に「共通感覚」つまり、視覚と触覚に共通したイメージを与える。マッキーはこの共通感覚が一次性質が事物そのものに

³ 経験の内在的特徴の議論はマッキーの「モリニュー問題」の解釈に関係している。Mackie, J. L.(1976), *Problems from Locke*, Oxford: Clarendon Press, pp. 28-32. を参照。

類似する根拠となると述べている⁴。

しかし、マクダウェルによればこの考えも上手く行かない。というのも、経験が持つ無意識的な解釈能力は色の場合も働いているだろうからである[例えば、我々は程度の違う赤の観念を同じ赤だと認識するだろう。]⁵。また、同じ経験に内在する作用ならば、形の場合はその特徴が機能していて、色の場合は機能していないことを我々は確実に知ることはできない。となると、経験の内在的特徴および「類似」の観念によって一次性質のみが実在し、故に客観的と言うことはできないだろう。そこで類似によって実在を示す考えをあきらめ、意識に現れるもの、すなわち「マニフェスト・イメージ」としては一次性質も二次性質も同様であるが、一次性質は「科学的イメージ」として客観的だと想定することによって一次性質／二次性質の区別を保持しようと試みるかもしれない⁶。しかし、そうになると、一次性質は客観的であると同時に知覚されうるものであるという(マッキーが共有する)ロックの直観をすて、「マニフェスト・イメージ」(これは先の客観的／主観的の区別の第二の次元と同じと考えてもよいだろう)としては一次性質も二次性質も同じ身分だと言わねばならない。

結局、客観的／主観的の区別の第二の次元、すなわち、適切な条件下で対象を見た時に一定の知覚を与えるという点において一次性質を客観的とするならば、同時に二次性質も客観的としなければならない。そして、客観的なもの＝実在するものと考えれば、この第二の次元では二次性質も実在すると言わねばな

⁴ Mackie(1976), p. 32.

⁵ []内に相当する文章は紹介論文の中にはない。「経験の内在的特徴」に関して、マクダウェルは詳しい説明をしていない。従って、ここでの経験の内在的特徴概念はマクダウェル自身というよりも、報告者による解釈によるところが大きい。

⁶ ここでの「マニフェスト・イメージ」と「科学的イメージ」は Sellars, W. (1963) "Philosophy and the Scientific Image of Man", in *Science, Perception and Reality*, London: Routledge & Kegan Paul. によっている。

らないのである。

2. 価値の实在に対する説明の实在テスト

マクダウエルは、マッキーとは反対に、我々が経験する知覚を額面どおり、誤りのないものとして受け入れることを主張する。その理由の一つは、ある対象が赤いということは、ある対象が(特定の状況で)まさに赤く見えるということによってもっともよく理解されると考えるからである。

しかし、このような考えは「催眠力」の議論に代表されるように、説明上の「余剰」であるとみなされたり、循環であるとみなされたりする⁷。しかし、マクダウエルは、物体の表面の構造によって色の経験を説明する人が、いくらその説明が上手くいったとしても、「ある対象は赤く見えるものである」ということを整合的に否定することはできないだろうと述べる。マクダウエルによれば、例えば色を物体の表面構造に還元することで満足し、因果的説明に無関係なものを排除するというような説明は不十分である。そして、真の实在の説明テストとは、問題となっている性質(ここでは事物に「赤い」という性質があること)の实在を一貫性をもって否定できるかどうかを確かめるものでなければならない、と主張する⁸。つまり、マクダウエルは、赤の知覚を説明するのに「対象が赤く見える」という事実は説明上不要であっても、それだけでは、「対象が赤く見える」という現実自体は否定できない、と言うのである。

マクダウエルは、マッキーが「特異性の議論」および「客観化のパターン」の

⁷ 本論で循環の議論は扱わない。この議論に関しては、McGin, C. (1983) *The Subjective View*, Oxford: Clarendon Press. および、次に紹介される奥田報告を参照。

⁸ この点については、Wiggins, D. (1980) "What Would Be a Substantial Theory of Truth?", in Zak van Straesen, ed. *Philosophical Subjects: Essays Presented to P. F. Strawson*, Oxford: Clarendon Press. p. 208 も参照。

議論で示唆し⁹、また、ブラックバーンが投影説¹⁰の立場から主張する「価値は実在の説明テストをパスできない」という考えを、この説明テストの読み替えによって反論する。ここでマクダウェルは話を簡単にするために、価値ではなく、恐怖を例にとって投影説と自らの説明の比較を行う。投影説の場合、世界に投影される反応(ここでは恐怖)は、世界に実在する性質が我々を触発するのではない仕方の特徴付けられる。すなわち、我々の心の中にのみ存在する反応を事物へと投影する仕方でも説明される。しかし、恐怖の場合、投影説による因果的説明だけでは不十分である。

マクダウェルによれば、もし我々が「自分自身を理解しようとする」¹¹という立場に立つならば、説明は、説明されるものが十分に理解されるようになさねばならず、かつ、それが正しいものであるかどうかについて議論し確かめることを可能にするものでなければならない。このような立場に立って、恐怖という事例を理解する説明をするならば、恐怖は、それが恐怖という反応に「値する」(merit)対象に対する反応であるか、単に恐怖を生み出す性向(propensity)があやまって生み出した反応なのかを見分ける仕方でも説明されねばならない¹²。となるとそれは事物に「恐怖を生み出す性質」が実在するという想定をしなければ適切かどうか判定することはできないだろう。従って、マクダウェルは恐怖性の実在を否定する主張は日常生活における我々の反応の説明を理解不可能なものにすると言うの

⁹ Mackie(1977), pp. 38-42, 42-46 を参照。

¹⁰ ここでマクダウェルは投影説をブラックバーンの旗印として次の文献に言及している。

Blackburn S.(1981) "Rule-Following and Moral Realism", in S. Holtzman and C. Leich eds., *Wittgenstein: To Follow a rule*, London: Routledge & Kegan Paul. Blackburn, S. (1980) "Opinions and Chances", in D. H. Mellor, ed., *Prospects for Pragmatism*, Cambridge; Cambridge University Press.

¹¹ このフレーズはブラックバーンからのもの。see Blackburn(1981) p. 165

¹² マクダウェルはこの適切な反応ということブラックバーンの準実在論からでは理解できないと批判している。

である。

マクダウェルによれば、この議論は価値にもあてはまる。価値と恐怖には、反応を適切なものとして判断する評価的観点について、価値の方がより論争的であるという点で類比が成立していないとされるかもしれない。しかし、それはここでは問題にならない¹³。確かに、評価的観点は価値を全く誤りのないものとして示す訳ではなく、評価的視点自体が様々な議論によって検証されうるものであり、そのような議論を通じて変化するものではある。しかし、そのことが我々に評価的視点を恣意的に創造させることを防ぎ、ある対象に対する反応が適切かどうか判断する余地を残しているのである。

以上の議論によって、マクダウェルの二次性質としての価値は実在の説明テストをパスし、適切な対象に対して適切な反応を生み出す性質としての価値の説明は余剰とはならないことが示されたと思う。

3. マクダウェルによる結論

以上の議論によって、一次性質的モデルでは説明できない価値の実在が、二次性質のアナロジーに移行することによって認められることが示された。価値は色が存在するのと同じ意味で、人間の感官との関係として、存在すると言えるようになるのである。

最後にマクダウェルが強調するのは、自身の説と投影説の違いは単に形而上学的な選好に関する違いではないということである。決定的な違いは、投影説の場合、対象に適切な反応をすることは、関係する加工のメカニズムが上手く機能することであるが、そこでのメカニズムというのは、それ自体対象として熟慮されうるものであるとされる。もし仮に、メカニズムを調べるのにそのメカニズム自

¹³ この点に関しては、奥田報告を参照。

体が必要とされるという事実がなかったとしたら、人は価値を世界に属するというナイーブな考えから離れることができ、投影説にも成功の見込みができる。しかし、果たして価値の世界から全く切り離された上で、加工メカニズムが上手く機能することを確認することは可能であろうか。結局、評価の観点自体が価値や美の理論となってしまうため、投影説は価値を価値のない世界に付与する理論をもたねばならないが、そのような試みは無意味である。マクダウエルの説は投影説のこの難点を克服する。この際、我々は善や美の他、全ての価値に共通する理論を持つ必要はない。個々の対象が実在し、反応が合理的と確証できる説明能力を創造し、事例毎に特殊な説明が出来ればこの問題は解決し得るからである。

4. コメント

マクダウエルの議論の何よりも評価されるべき点は、これまで実体的にとらえられてきた価値のイメージ(一次性質モデル)を二次性質という、主体と外部世界との関係として捉え直した点にあると言えるだろう。これによって、实在論は客観的かつ規範性を備えた道徳的性質の实在というナイーブな視点を離れ、動機の外在主義や個人間での規範の違いと言った事象を説明する道を手にしたと言えるだろう。

しかし、それは同時に価値の相対性を認め、实在論が従来備えているとされた普遍的な説得力を失うことになったと言える。価値の实在を認める以上、最終的な収斂先としての客観的实在が想定されているのであろうが、マクダウエルの議論では真にそのような収斂先が目指されねばならないものかどうか不明である。

結局のところ、マクダウエル流の实在論と投影説の違いは「評価的観点」をどのようにとらえるか、という問題に行き着くのだと思われる。価値が二次性質的なものである以上、触発体である事物と受容する能力が要請される。この受容する能力としての「評価的観点」が確定的でないのならば、視点そのものが正しく

機能しているかどうかを判じる手段があるのだろうか？マクダウェルは投影説のメカニズムを自己チェックができないものとして退けたが、この批判は自身にも適用されるのではなかろうか。

(ささき たく 京都大学文学研究科)